

## 盗まれたサボテン

「そこでお話しするわけですが」とクバートさんが話し始めました。「それは今年の夏、わたしが実際に体験したことなのです。」

わたしは夏のあいだ別荘ですごしていました。そこには何の憂哲もない、ありきたりの夏向きの別荘がならんでいました。ただ、森もなく、池や川もないので釣る魚もない、ないものづくしの別荘地だったのです。この別荘地を仕切っていたのは、人民党、こまめに動く書記のいる美化協会、真珠産業、それから年をとった、おせっかいな婦人郵便局長といった人たちでした。まあ、どこにでもあるありふれた別荘地でした。

わたしはそんな、健康によくて衛生状態も満点な別荘地に、二週間ほどだれにもじやまをさげずにポーツと浸っていたのです。ところがそうして過ごしているうちに、どこのだれかれと違うのではありませんが、このあたりに住んでいるだれもが、どうもわたしのことをあれこれとうわさしている気がしました。なにより、わたしのところへ届く手紙の封筒は封をするときに使った糊がいかにもつい先ほどにつけたばかりといった感じで、封からはみ出たアラ

ピアゴムがまだ光っているのです。

わたしは小声でつぶやきました。「どうみても、おれあての郵便物をだれかが開封しているな。やはり、あの郵便局のクソ婆あにちがいない！」なにしろ、郵便局員はどんな封筒でもうまくあけてしまいうすからぬ。

「もうすぐ後悔させてやるぞ！」もう一度、小声でつぶやくと、わたしは座って、できるかざりていねいな字で手紙を書きはじめました。その出だしは「ばけもの婆あ郵便局長殿、おせっかいの大鼻やは女殿、流行三周遅れ殿、おしゃべりの覗き屋殿、毒ヘビ殿、ガリガリうるさいヤスリ殿、婆あ魔女殿」などで始まり、手紙の終わりには敬具。そしてヤン・クバートと署名しました。なにしろ、チェコ語は語彙が豊かでひとつのことをさまざまに表現できますし、ときには歯に衣着せぬものずばりの表現力も持った言葉なのです。

わたしは三十四の表現を使ってこの手紙にすべての怒りを一気にぶちまけました。この三十四の表現を使うと、礼儀正しい紳士が個人的な感情に走らず、また、押しつけがましくもならずあらゆる女性に対して、はっきりとものが言えるのです。わたしは、これでよしと手紙にしっかりと糊で封をしました。それから、あて先として自分の住所を書いて、一番近くの町へ行ってその手紙を投函したのです。その翌日、わたしは郵便局へ飛んでいき、窓口に行き止まりました。そして、精いっぱいこやかな笑みを浮かべてきましたのです。

「局長さん、わたしあての手紙が来ていませんか？」——「訴えますよ。ひどい人ね！」と局

長さんは、これまで見たことのないこわい顔をしてわたしに怒りをぶつけたのです。――「局長さん」と、わたしはまるで相手をいたわるようにして言いました。「ひょっとしたら、なにか不愉快なことを書いたものでも読まれたのですか？」――それだけを言っ、わたしはさっさと郵便局を後にしました」

「そんなの、どうってことありませんよ」とホルベン・サポテン團の責任者のホランさんが、ちよつと批判はい口調で言いました。「その手はちよつと単純すぎますね。ではどんな手を使ってわたしがサポテン泥棒を捕えたか、こんどはわたしがお話ししましょう。うちのホルベン老人がとてつもないサポテン狂なのはだれでも知っています。あの人のサポテンコレクションには、珍種は別としても三十万コルナの値打ちがあります。これはけっしてうそじゃありません。ところがホルベン老人は、そのコレクションを公開したくてたまらないのです。」

「ホラン君、サポテン収集はとても品のいい趣味だから、もつと多くの人のあいだに広めなくてはね」とホルベン老人はわたしにサポテン團を公開したい理由を説明しました。でもわたしは思いましたね。「心の狭いサポテンコレクターが、千二百コルナもする金色のグルソンを見れば、身もだえするほど欲しくなるにきまつてる」、とね。でも、どうしても公開しろと言われればしたがわかないわけにはいきませんでした。ところが、去年になってわたしたちは、サポテン團のサポテンが少しづつなくなっていくのに気づきました。それも、なくなるのは、だ

それでも欲しがって目をつけるやつではないのです。逆によほどのサポテンコレクターでないとその価値がわからない、ごく特殊なサポテンだけがなくなるのです。

初めはエキノカクトス・ウイスリゼニ、二度目はグレスネル、さらにコスタリカから直接取りよせたウイティア、その上フリチが送ってくれた新種までがなくなつたのです。さらに、もう五十年以上もヨーロッパでは見た人がいない珍種のメロカクトス・レオポルディー、そして最後にサント・ドミンゴから初めてヨーロッパにきたピロセレウス・フィンブリアトスがすがたを消しました。このサポテン泥棒は、たいした目利きにちがいありません！——ホルペンさんがどんなに腹を立てたか、とてもみなさんには想像がつかないほどでした。「ホルペンさん」と、わたしは言います。「サポテン園の公開をやめて、温室に外部の者が入れないようにすれば、それでもうなんの問題も起きなくなりますよ」——「それはだめだ」とホルペン老人は声を荒げました。「ごういうすばらしい趣味はすべての人のためにあるんだからね。ホラン君、その何ともいまいましいサポテン泥棒をさっさと捕まえてくれよ。いまの警備の連中をクビにして、別の人間を雇い入れるといい。警察など、関係方面にもしつかり知らせるんだ」いずれにしても三万六千点もあるサポテンの鉢の一つひとつを見張るわけにはいきませんしね。どうしたらよいか頭をかかえてしまいました。

まずはせめてと思つて、ちやうど所轄の警察を停年退職した警官を二人雇つて、警備の連中の監督にあたらせることにしました。そんなときに、例のピロセレウス・フィンブリアトスが

またなくなつたのです。ピロセレウス・フィンブリアトスが植えられていた鉢は砂がまるでえぐられたようにくぼみになっていました。さすがのわたしもこれには頭にきて、自分でもそのサボテン泥棒の行方を探し始めたのです。

ご存知かどうか知りませんが、本格的なサボテンコレクターというのは、イスラム教の苦行僧の宗派のように、コレクターの組織がいくつもあるのです。サボテンのコレクターは口ひげのかわりにサボテンのトゲが生えているんじゃないかと思うほどです。それほどまでに、サボテンにのめりこんで夢中になっているのですね。わたしたちの町には、まるで宗派のようなサボテン愛好家の組織が二つあります―ひとつはサボテン愛好家協会、もうひとつはサボテン愛好家連盟です。どかがどうちがうのか、わたしにはわかりません。サボテン愛好家協会はサボテンには永遠に不滅の魂が宿っていると信じ、サボテン愛好家連盟は血のいけにえをサボテンにささげているのでしょうかね。

ところがこの二つの組織は、おたがいにいがみあい、さんざん悪口を言いあっているのです。まるで、地上どころか空中でも火と剣を持って戦っているといったあたりさまなのです。そこでわたしはこの二つの組織をふたつとも訪ねて、両方の会長から詳しく話を聞きだしました。

つまり、ホルベン・サボテン園のサボテンを盗むような人物が―たとえばの話だが、もう一つの組織の会員のなかに―いる、といった心当たりがないかどうかきいてみたわけです。わたしがこの二人の会長に、ホルベン・サボテン園から盗まれた貴重な珍種のサボテンの名前を具

体的にあげました。すると、二人とも、「あちらにそのような珍種をわざわざ選んで盗むことができるような目の利く会員は一人もいませんよ」と、すっかり信じて疑わないといった風に言い切ったのです。さらに、「なにしろ、あつちのどうしようもない、レベルの低い、経験の浅い連中は、ピロセレウス・フィンブリアトスはもちろんのこと、ウイスリゼンやグレスネルがどんなサポテンなのかも見当さえつかれませんか」とまで言うのです。

ところが、自分の方の会員については、「みな、立派な人たちでうそなどつくはずはない」と保証し、そういう彼らがなにかものを盗むなんてことはありえないと言うのです。しかし、こうも言いました。「でも、めったに見ることのできないサポテンの珍種なら、話はまったく別です。ただ、仮にわたしたちの会員のだけれが、そういうウイスリゼンのような珍しいサポテンを手に入れて持っていたら、ほかの会員たちにも見せずにはおれません。手に入れたサポテンを崇める、宗教まがいの儀式をにぎにぎしくとりおこなって、かならずいっしょに觀賞しますよ。でも、会長であるわたしの耳にそういう話はいつさい届いていません」

ふたりの会長さんはどちらも立派な紳士でしたが、二人ともまるで口裏を合わせたように同じことを言っていました。つまり、正式に認可され、認められている組織に属していないサポテン愛好家が出て、その連中が一番始末が悪いというのです。なんでも、その連中はサポテンに夢中になるあまり、穏健な二つの会のどちらとも折り合いがつけられないそうです。あくまでも自分たちの説を曲げず、聞き入れられないと、ときには暴力に訴えかねないというのです。

つまり、なにをしかすかわからない連中、というわけです。

結局のところ、この二人の会長から具体的に役に立つ話はなにも聞けません。やむをえずサポテン園に帰ってから、そこにあるみごとなカエデの木の上に登って、考えてみました。考えことは、木のとっぺんでするのが一番ですからね。木のとっぺんにいると、なにか解放感がありますし、木といっしょに体も少し揺れますが、あたり一面を、それこそ文字通り高所から見る事ができるといわけです。いにしえの哲学者たちはきつとウグイスのように、木の上で暮らしていたにちがいないとわたしは思っています。それはともかく、そのカエデの木の上でこんなアイデアが浮かびました。

まず顔見知りの園芸家のところをかたっぱしからまわって、たのむのです。「ねえ、きみのところにだめになったサポテンがないかな？ ホルベンさんが実験に使うからほしい、と言っているんだ」——こうして、弱ったりいたんだサポテンを数百点あまり手に入れて、その夜のうちにホルベン・サポテン園のあちこちにまぎれこませておいたのです。それから二日間、わたしはなにもせず、じっと息をころしていました。そして三日目に新聞各社に、次のような内容のレポートを送り、それを記事にもらったのです。

### 世界的ホルベン・コレクション危うし！

ホルベン・サポテン園はサポテンのコレクションとしては世界でも屈指の存在

である。ところが、知りえた情報によれば、現在、ホルベン・サポテン園の温室ではこれまで知られていなかった新しいサポテンの病気が広まっているとのことである。

このサポテンの病気はポリヴィアから持ちこまれた可能性が高い。サポテンは特にこの病気にかかりやすく、一定の潜伏期間を経て、発病する。根から腐りはじめ、さらには幹へと広がっていく。この病気の病原体はきわめて感染力が強いようで、小胞子によって急速に感染を広げていくが、この小胞子はまだ同定されていない。

このため、ホルベン・サポテン園は現在閉鎖中である。

レポートを送ってから、約十日後—その間、わたしとホルベンさんはサポテン愛好家たちから質問の雨を浴びせられないように、隠れていなければならなかったのですが—わたしは新聞各社に、もう一度次のような内容のレポートを送りました。

#### ホルベン・コレクシオンは救えるか

さらに知りえた情報によれば、イギリス王立植物園のマッケンジー教授は、世界的に有名なホルベン・コレクシオンに発生し、爆発的に流行している病気の病



原体の同定に成功した。同定された病原体はマラコルヒザ・バラグアユエンシス・ウィルドで、特殊な熱帯カビの一種である。

マッケンジー教授はこのカビにおかされたサポテンには、アルコールに溶かしたハーヴァード・ロトセン液の散布をすすめている。目下ホルベン・コレクションで、教授のすすめるこの新しい薬を使った大規模な実験がおこなわれている。これまでのところその効果はきわめて良好である。

ハーヴァード・ロトセン液はわが国でも、〇〇薬局で入手が可能である。

新聞にわたしが書いたレポートが記事として載ってから、私服刑事を一人、その薬局に張りこんでもらいました。わたしは電話のそばに陣取って電話が鳴るのを待っていたのです。二時間ほど待っていると、その薬局に張りこんでいた刑事から電話がかかってきました。

「ホランさんですか、やつを確保しましたよ」——この電話を受けた十分後にはもう、わたしは刑事の確保した小柄な男の襟をつかんで、振り回していました。

「なぜ」と、その男は文句を言ったのです。「なぜおれを振り回すんだ？ おれはただ新聞に出ていたハーヴァード・ロトセン液を、買いに来ただけだぜ」

「そんなことわかっているよ」と、わたしは答えたのです。「ハーヴァード・ロトセン液なんてはじめからないんだ。新しいサポテンの病気がもともとないようにな。おまえだろ、ホルベ

ン・サポテン園へ何度も忍びこんで貴重なサポテンを盗みだしたやつは。このくそ悪党め！」  
ところが男は「ああ、よかった」と思わず大きな声で叫んだのです。「それじゃ、そんな病  
気はなかったんですね？ おれんとこのサポテンもそいつをもらっていないか心配で心配で、  
おれはこの十日、夜もほとんど眠れなかったんですよ」

わたしは男の襟をつかんで自動車にのせ、男の住んでいるところまで案内させたのです。刑  
事もいっしょでした。いや驚きました。わたしはホルベン・コレクシオン以外でこれほどのサ  
ポテンコレクシオンをこれまでに見たことがありませんでした。男はヴィソチャニの小さな屋  
根裏部屋に住んでいました。

そうですね、部屋の広さはおおよそ間口が三メートル、奥行きが四メートルぐらいしかあり  
ませんでした。部屋の片隅に小さなテーブルと椅子、それに毛布があるだけで、残りは全部サ  
ポテンで埋まっていました。しかもそのサポテンの一つひとつが、まるで展示してあるかのよ  
うにきちんと整理されているのです。これほどのコレクシオンは見たくてもそうおいそれとは  
見られませんよ。

「で、こいつがホルベン・サポテン園から盗んだサポテンは、どれですか？」と、わたしは  
刑事にきかれました。やつの方を見ると、目にいっぱい涙をためてふるふる震えていました。

「いや、そうですよね」と、わたしは刑事に答えました。「こいつはこちらが思っていたほど、  
値打ちのあるサポテンを盗んでいませんでした。たかだか五十コルナ程度の価値しかありません

ん。ですから、この始末はこちらでつけさせていたきたいと、署に帰ったら署長さんに報告してください」

二人だけになってから、わたしは男に言いました。「それじゃあ、きみ、まずサポテン園から持ち出したサポテンをここにまとめて出してくれ」——男は今にも泣き出さんばかりでした。眼をしきりにしばたきながら、小さな声で言ったのです。「刑務所でおつとめさせていただきますから、ここは何とかこのままにしていただけませんかね？」

「ばかを言うな」わたしはやつをどなりつけました。「まず、盗んだものをここに出すんだ、もどさなくてはいけないからな」——男はすなおに次から次へと盗んだ鉢だけを抜き出してきて、部屋のかたわらに置きました。八十鉢はあったと思います——まさかこれだけの数のサポテンがなくなっていたとは、思いもありませんでしたよ。

どうやら一つひとつ、長年かけて持ち出したにちがいありません。念のため、やつをもう一度どやしつけました。「いいか。もうほかに隠しちゃいないだろうな？」

すると、やつはおいおい泣き出して、すてきな白い色のデ・ライティーを一鉢とコルニゲルを一鉢さらに抜き出してきたのです。そして、まだすすり泣きをやめないで言いました。「誓って、もうこれ以外に、サポテン園から持ち出したサポテンはありません」

「おまえがうそをついていないか、いずれわかる」わたしは男を大声でとなりつけました。

「さあ、白状しろ。一体おまえはどうやってサポテンの鉢をだれにも見つからずに外に持ち

出せたんだ？」

「つまり」男はつかえつつかえ答えました。声を出すたびに興奮した喉仏のどぼとけが飛び跳ねているのが見えました。「つまり……その、つまり、ある服を着て行ったからです……」

「ある服って、どんな服だ？」とわたしは声を荒げました。するとやつは、きまり悪そうに顔を真っ赤にして、口くちもりながら答えたのです。「すみません、あの、女の服なのです」

「なんだって」わたしはおどろいてききかえました。「またどうして女性の服など着たんだ？」

「どうしてって」男はおずおずと答えました。「すみません、つまり、婆ばあさんだと、だれもろくに注意を払わないんです。それに——」男はさも得意げにこうもつけ加えたのです——「女がまさかサボテンを盗むなんて、だれも考えもしませんからね。こちらにとっては好都合なんですよ！ そりゃ女だって、さまざまいろんなことに情熱を燃やすかもしれませんよ。でも、コレクションだけは決してしません！ 早い話が切手のコレクション、でなければ、カプトムシのコレクション、あるいはインキユナブラインキユナブラのコレクションといったことをしている女性にこれまでに会ったことがありますか。ないですよね！ 女性にはそう、なにかに凝こるといったことがないんです——そう——何と言ったらいいか、なにかにのめりこみ、凝こることがないのです。

女性は、おそろしいくらいさめているのです！ そこが、男性と女性の一番ちがうところなのです。だからこそ、男性しかコレクションをしないんでしょう。宇宙というのは、星のこ



レクシオンにすぎない、そうわたしは思います。どこかに男性の神様がいて、その神様が世界というもののコレクシオンをやっているのです。だからこそ、世界の数、つまり星の数は恐ろしくなるほどに多いんですよ。ああ、いつかわたしもこの神様の場所に場所と手だてを手に入れることができれば！

わたしはサポテンの新種をつくりだそうとしてるんです。夜ごとにわたしは、そう、毛が金色で花がリンドウのように青い、そんな新種のサポテンの夢を見るのです——もう名前までつけてあります。セファロセレウス・ニンファ・アウレア・ラツエックとね。——つまりわたしの名前はラーチェックというのです。お見知りおきください。ですから、サポテンの名前はマミラリア・コルブリナ・ラツエックでもいいですね。でなければアストロフィットム・ケスピトスム・ラツエックとでもつけますか。なにしろサポテンの新しい名前は魔法のようにいくつでも考えつきますからね！ ご存じですよね——

「ちよっと待て」わたしは男の話を折って、聞きました。「おまえは、サポテンをどこに入れて持ち出したんだ？」

「つまり、その、胸の中に入れてたんですよ」男は恥ずかしそうに言いました。「トゲに刺されて、チクリチクリとなんともいえない気持ちでしたよ」

わたしはもう男から盗んだサポテンを取りかえず元気は残っていませんでしたよ。「いいかい」わたしは男に言いました。「これからおまえをホルベンさんのところへ連れて行く。覚悟

しておけ、両耳とも引きちぎられるぞ——ところが、信じられないことに、この二人は会ったとたんにすっかり意気投合してしまっただけですよ！

ホルベン・コレクシヨンの三万六千の鉢を全部見終わるまで、二人は一晩じゅう温室の中にいたのです。「ホルン君」とホルベンさんはわたしに言いました。「サポテンの価値がわかる人間にはじめて出会うことができたよ」それからひと月もたたないうちに、ホルベンさんは、サポテンを現地で収集させるためにこのラーチェックをメキシコへ向かわせたのです。ホルベンさんは、涙を流しながらラーチェックの無事を祈っていました。二人とも、メキシコのどこかにセファロセレウス・ニンファ・アウレア・ラツェックが生えていると、本気ですっかり信じこんでいたのですね。

ところが一年もたたぬうちにわたしたちは、ラーチェックがメキシコで殉教者としてりっぱに死んだと知らされたのです。妙な話でしたが、どうも彼はメキシコのある先住民の一族のところで、チクリーというサポテンを見つけたらしいのです。このチクリーをこの先住民の一族は神聖なものとしてあがめており、彼らにとっては父なる神の血を分けた兄弟だったのです。

そんなことを知らないラーチェックは、そのサポテンに頭を下げなかつたか、ひょっとしたら盗もうとしたのかもしれませんが。さすがに腹を立てた先住民たちは、ラーチェックを縛りあげると、エキノカクトス・ヴィスナガ・フーカーという名のサポテンの上に坐らせたのです。このサポテンはゾウのようななつともない大きさで、その上ロシア軍の銃剣のような長いトゲ

がいつばいついついてるのです。これでさすがのわが同胞も運が尽きてしまい、サボテンの上で息を引きとったそうです。これがあのサボテン泥棒の最期なのです」

注一 アルベルト・ツォイチニフ・フリチ 一八八二—一九四四

チエコの有名な外国旅行家でサボテンの収集家。ブラハにあった私設園芸場で彼は植物実験をおこなっていた。

注二 インキエナブラ

十五世紀に西欧でつくられたもともとも初期の時代の活字印刷物のこと